

新古改撰誌記

日光 三冊之内
御参詣一件 壺

卷之十四

(朱書)
「五百五十四」

日光 御参詣并 御留守中御用留 天

摂津守殿御渡

金之丞殿御達

来年四月日光山

御宮江

御参詣可被遊旨被

仰出候ニ付、

為御祝儀明十八日服紗小袖麻上下着用惣出仕之事

一、西丸江も為御祝儀惣出仕之事

一、右為御祝儀惣出仕之節老中下総守・河内守・堀大和守

御本

丸・西丸若年寄中宅江何れも可相廻候事

但万石已上病氣・幼少之面々

御本丸・西丸月番老中江使

者可差出候事

一、在国・在邑之面々并隠居之面々老中下総守・河内守江飛札可差

越候事

右之通可被相触候

二月

右同月十七日当番所より差越、五役承付御徒押江相廻ス

先年日光山 御成之節諸向之勤方、其向々江書出候様被相触

遂吟味、帳面ニ記可被差出候

右之通越前守殿・摂津守殿被仰渡候間、扣共式冊自分共江可被差
出候事

二月

佐々木三藏
榊原主計頭

右二月廿二日御目付野間忠五郎殿御達、五役承付返上

摂津守殿御渡

忠五郎殿御達

享保十三申年・安永五申年日光

御参詣之節向々御入用金高

口々相認、尤此度之儀者享保・安永之節御入用より格別相減候様
相糺、右減之分其口々江朱書ニ致、積書早々可差出候

右之通向々江可被相達候

二月

右依田源十郎より差越、五役承付御徒押江相廻ス

摂津守殿御渡

三藏殿御達

一、城内 御泊 御座所并領内

御休場共

公儀より普請・修復

有之筈之事

一、城主より此度馳走不及諸事御賄ニ成候、献上物之儀者追而可相達
候事

一、御泊之城主、家中・町屋・御道筋修復之儀常々之通いたし、新規

修復等仕候事堅く可為無用候、且又何れも下宿ニ罷成候家来屋敷も右ニ可准候事

一、木打繁り候所ハ、見分之上枝打払候様可申付候事

右之趣城主江相達候間可被得其意候、其外之面々江も可被達候

三月

右三月八日当番所阿久沢弥平次差越、五役承付同人江返却

伊勢守殿御渡 佐々隼之助殿御達

明廿五日光准后・同新宮・智恩院御門跡登 城、於大広間

御舞台御能有之候ニ付、当番・詰番之布衣以上之面々何茂服紗小

袖麻上下着し五時登 城候様可被達候、御礼ニ相廻ニ不及候

右之外罷出不及、諸事前々之通可被心得事

三月

右当番所山本庄右衛門差越、五役承付御徒押江相廻ス

御中間頭江

御納戸

来四月日光山 御宮 御参詣被 仰出候ニ付而者御納戸より

御請取被成候御品御座候ハ、来月上旬迄ニ員数御達御座候様

いたし度、此段及御掛合候、已上

三月

御納戸頭

右当番所山本庄右衛門差越、承付返却

御納戸頭衆

御中間頭

御先練御中間

一、熨斗目

七

一、綾縞袷

七

御中間御供組頭
七人

一、脚半

式百人拾四足

式百人拾四人

一、那須紙

紐共

御中間

一、筆

式対物

御中間

一、墨

大形

御中間

右之通御座候、以上

四月

御中間頭

右同十日御納戸江御供組頭孫兵衛ヲ以差遣、深尾善十郎請取ル

摂津守殿御渡 遠藤鐘次郎殿御達

今度日光山 御宮 御参詣之儀万端御手輕ニ被遊、下々迄無

益之費無之様ニとの思召候、依而万石以上を始御供其外、日光表

江罷越候面々并家来・下々ニ至迄、衣類・諸道具可成丈質素ニ

いたし無益之儀無之様可被致候、且又 御旅館・御昼休等 御座

所辺迎も格別見苦敷無之分ハ其儘ニ而御用立、左様ニも難相成分

者随分手輕ニ修復いたし、座敷向・其外旅宿等者猶更在来之儘ニ

而不苦、若難捨置分ハ手輕ニ取繕ひ、何れ歟成ニ御用弁候得ハ宜

儀与相心得可被申候、尤御固筋之儀ハ御先格之通たるへき事ニ

候、乍併其内ニも簡易ニ相成可宜儀も候ハ、可被申聞事

一、御道筋宿々并道・橋等も在来通ニ而不苦、若難差置場所も得与見

分之上、手輕ニ取繕之積可被心得事

右之趣安永・文政度ニも追々被 仰出候事ニ候得ハ、此度者格別御

手輕ニ与 御趣意候間前以其心得ニ而取調可被申候、尤其段向々江
可被達候

三月

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

安永五年四月日光 御社参之節御留守中勤番等、諸向より差
出候様信濃守殿・伊勢守殿被仰渡候間取調、美濃帳ニ相認三冊可
被差出候事

四月四日

岡村丹後守
中川勘三郎
松平四郎

右四役承付返却

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

当四月中申達候安永五 年四月日光 御社参御留守中勤方、早
々可差出候事

五月

岡村丹後守
松平四郎
野間忠五郎

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

日光 御参詣之節御先勤・御供相勤其許方并支配向役々之者、
自分具足持参いたし候者も有之候哉、且御貸具足御渡ニ相成候
者も有之候哉否哉承知致度候、取調早々可被申聞候事

四月

榊原主計頭

下ケ札
御書面具足之儀ハ、享保・安永之度 御免ニ付為持
不申候旨、書留見当り不申候得共申伝御座候、組之
答 者御貸具足相願候儀も書留無御座候

四月

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

摂津守殿御渡

浅野金之丞殿御達

一、行列之事、我より前ニ歩人と其あい二三間と心得、前ニ歩人早く
成候ハ、我も早く歩ミ、人止り候ハ、我も止り、兎角二三間
より延ち、め無之様ニ御供可仕事

一、我より跡ニ歩人之あい者一切見合申間敷候、若其合切候共詰
り候共夫ハ跡之人之越度ニ候、仮令跡より我後江行届候共、
又ハ我より先江押ぬけ候共、我ハ前之人之あい定之如く守り少
も動転なく歩ミ可申事

一、行列早め候へとの時ハ惣 御先より順々ニ早め可申候、鎮め候
時も同断之事

右四月廿四日御達

来卯年四月日光御供姓名書

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

日光 御宮 御参詣之節御供人数書、安永度之趣を以可被書
出候、以上

五月

佐々木三蔵
榊原主計頭

黒鋏之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

日光 御参詣之節御持鎗役并御小道具役之儀ハ勿論、此外都而
諸御道具類を持御供仕候役前之者共人数割当方之儀、且手代り
等之差別惣人数、早々取調可被差出事

五月

佐々木三蔵
榊原主計頭

御中間頭 江
御小人頭

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門
御小人頭
柳田勝太郎
小笠原貢蔵

右者来卯年日光 御参詣之節御供之方 江可被書出事

五月

佐々木三蔵
榊原主計頭

右十日御部屋良格を以被遣、承付返却

右之通相心得可申哉奉伺候、以上

五月

右十二日差出ス

黒鋏之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

右ハ来卯年日光山 御宮 御参詣ニ付御供相勤、供人数并組
之者人数書共来ル廿日迄ニ可申聞候事

五月

諏訪庄右衛門
中川勘三郎

黒鋏之者頭

鈴木宇右衛門

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

御小人頭

柳田勝太郎

小笠原貢蔵

御駕籠之者頭

菊地官左衛門

中山賀一郎

小山仁左衛門

覚

御中間頭
御小人頭
江
御駕籠之者頭

一、熨斗目

一、綾縞

一、麻上下

一、素袍袴繻子脚半
龜井坊

右安永度日光
御社参之節新規請取候員数、早々取調自分共江

可申聞事

五月

佐々木三藏
榊原主計頭

右前同断

御中間御先練
七ツ

一、熨斗目拾

同 御供組頭
壹ツ

一、綾縞拾

御小人組頭
共 拾六

一、熨斗目拾

御日傘持
壹具

一、麻上下

御駕籠之者
七拾人
黒鍬之者
貳百八拾五人
内御掃除之者
貳拾九人

御小人
貳百八拾四人
但組頭共

御中間
貳百八拾四人

御小人頭
貳人

御駕籠之者頭
三人
右同断

御中間頭
貳人

侍貳人宛
小者貳人宛

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

侍貳人
小者貳人

右ハ来卯年日光
御参詣ニ付安永度之振合を以取調候処、書
面之通御座候、以上
五月
五役頭

右前同断

五月

御中間頭
御小人頭

黒楯之者頭
御中間頭
御小人頭

来卯年日光山 御参詣ニ付、御行列足並其外稽古之儀ニ付旧
記并衣服等取調、一両日中可被申聞事

五月 浅野金之丞
右同十八日掛り森田岡太郎より差越、承附返却

奉伺候覚

△ 御供足並稽古之節私共罷出可申哉、着服之儀ハ平服与相心得可
申哉、組之者儀ハ御中間・御小人御役羽織着用為仕、御役羽織
無之者右服ニ准為着可申哉、御駕籠之者も御役服・御役羽織ニ
而差出可申哉

○ 一、御行列 上覧之節私共并組之者旅装束ニ而罷出可申哉
但脚半つまミはしよりニ而罷出可申哉
右之趣奉伺候、以上

寅十月

御中間頭
畔柳丈之進
松永半左衛門
御小人頭
柳田勝太郎
船川多四郎
御駕籠之者頭
菊地官左衛門
中山賀一郎
小山仁左衛門

附札

△ 足並稽古之節御中間頭・御小人頭并組之者共罷出候ニ不
及、尤御旗之者儀者追而相達可申、御駕籠之者頭・組共
書面之通ニ而候

○ 書面 御旅行之節之通相心得可申候

但馬守殿御渡 金之丞殿御達

来卯年日光山 御参詣ニ付、諸向江請取候新規御道具内、油簾
并桐油之類 還御之後外御用ニ無之分ハ御用相済御細工所江相
達候様可致候、左候ハ、断書差出候ハ、其趣書加可被差出候
右之趣向々江可被相達候

五月

黒楯之者頭
鈴木宇右衛門
御小人頭
御中間頭
畔柳丈之進
松永半左衛門
御駕籠之者頭
柳田勝太郎
小笠原貢藏
菊地官左衛門
中山賀一郎
小山仁左衛門

右ハ来卯年日光 御参詣之節御供被 仰付候旨、但馬守殿被
仰渡候段三藏殿被申渡候事
右当番所三橋貫之進より差越、承付返却

日光 御参詣ニ付在方出役之者伺書
覚

在方出役
御中間
御小人
拾五人

右出役之儀者前々郡代方ニ而罷出候処、寛政四子年十二月御目付方より出役仕候様被 仰渡其砌より罷出候儀ニ付、前々日光御参詣之節出役罷出候有無并勤方等之儀郡代方江承合候処、文化三寅年三月郡代屋敷類焼之砌諸書物焼失ニ付相分不申旨申聞候間、此度日光 御参詣之節者是迄遠 御成之節勤来候振合を以出役相勤候様可仕候哉之旨右出役之者より申出候ニ付取調候之处、先年 御社参之節郡代方より出役之者有無共書留焼失ニ付相分不申候、殊ニ右出役之者一牀勤方之儀遠 御成之節之持場内在方人留之為メ出役罷出候儀ニ御座候処、日光 御参詣ニ付而ハ 御山内其外所々勤番御固メも被 仰出候儀ニ御座候間、右出役之者罷出候ニも及申間敷奉存候、譬出役罷出候儀ニ御座候而も右人数ニ而者 逆も手足り申間敷奉存候、右増人差出候ニも先年之御振合ニ而ハ此度 御参詣ニ付而も御中間・御小人共御供其外多人数罷出候儀ニ付、在方出役増人差出候儀ハ乍見越も御人差支可申哉ニ奉存候、依之此段御内慮奉伺候、以上
寅五月
附札 差出ニ不及候
五月 佐々木三藏
榊原主計頭
右同廿六日差出ス

御中間頭
御小人頭

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

来卯年四月日光山 御参詣之節、御目見已上御供之内七拾歳已上之者駕籠御免被遊候間、御行列之内江駕籠ニ而相立候様可被致候、両御番・小十人組頭・小十人組者七十歳已上之内步行御供続兼可申候間、年若之者与 操替候様可被致候、尤一組之内不足之分者他組より助御供可被致候、一組ニ加へ小十人組頭も七十歳已上之者 他組より若手之組頭操替候様可被致候、其外步行ニ而御供仕候分八年若之者与 操替候様可被心得候
一、御目見已下之者步行御供ニ候間、七十歳已上之者八年若之者与 操替候様可被致候
一、右 御目見已上駕籠 御免之儀、七十歳已上ニ候共其身達者ニ而騎馬ニ而御供相成候分ハ駕籠ニ不及騎馬ニ而御供可有之候、且又御目見已下之分共七十歳已上ニ候共可相勤者ハ操替ニ不及候右之趣御供之向々江可被達候

五月

右同廿八日主計頭殿御達之旨、行方源兵衛差越ス

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

来卯年日光山 御参詣ニ付御供之分、安永度之振合ニ而 御昼
休所ニおゐて御賦 御泊所并日光ニ而ハ御賄被下候ニ付人数書
可差出候事

六月

右同十七日三藏殿被遣

佐々木三藏
榊原主計頭

覚

御旅館泊り
御賄被下候分

御中間

九人

内

御供組頭

七人

御中間目付

七人

御持鎗之者

六人

日光 御参詣并三城 御泊、日光

御旅殿 御休所ニ而御配御

料理被下候人数

御昼休

御配被下候分

御中間頭

七人

御中間

百六拾七人

右之通御座候、以上

寅七月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

森澄太郎作

右掛江差出ス

御中間頭 江
御小人頭

日光山 御参詣之節勤書并諸請取物取調可差出旨申達候处、勤

書帳之内江請取物一帳ニ相認被差出候得共、勤書・請取物与別々

式冊宛早々可差出候、則帳面式冊返却いたし候事

七月

佐々木三藏
榊原主計頭

右御徒目付十五郎より差越、承附返却

黒鍬之者頭

御掃除之者頭

御中間頭 江

御小人頭

先達而差出候安永五申年日光 御参詣御留守中勤書、御一覽も

相済被成御下ケ候ニ付差遣候、落手可致候、且来卯年四月日光

御参詣御留守中勤方、安永度之振合を以伺書差出候様可為

達旨伊勢守殿・信濃守殿被仰渡候間、当秋中迄ニ伺書可差出候、

其節自分共扣帳面式冊可差出候事

八月

岡村丹後守
松平四郎
野間忠五郎

右同十六日遠藤鐘次郎殿被遣

黒鍬之者頭

御中間頭 江

御小人頭

御駕籠之者頭

来卯年四月日光 御参詣ニ付諸伺願并御断物等之儀、御時節前
差懸り伺候儀者格別、其外者当十二月中迄ニ早々取調進達可致候、
且又問合掛合等之儀も是又同様当年中迄ニ可差出候

右之趣越前守殿江伺相済候ニ付申達候事

九月

初鹿野美濃守
佐々木三藏
榊原主計頭

右同廿四日行方源兵衛より差越ス

御徒目付組頭江

御徒目付組頭
御貝役
押御太鞍役
御徒目付
御徒押
黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

右来卯年四月 日光御供之者高附・性名書、早々可差出候事

九月廿四日

覚

一、高百俵

内八拾五俵御足高

黒鋏之者頭

鈴木宇右衛門

御中間頭

畔柳丈之進

一、高八拾俵

内五拾俵御足高

同

松永半左衛門

一、高八拾俵

内六拾五俵御足高

御小人頭

柳田勝太郎

一、高八拾俵

内六拾五俵御足高

同

船川多四郎

一、高八拾俵

内六拾五俵御足高

御駕籠之者頭

菊地官左衛門

一、高六拾俵

内四拾五俵御足高

同

中山賀一郎

一、高六拾俵

内四拾五俵御足高

同

小山仁左衛門

一、高六拾俵

内四拾俵御足高

御中間

式百八拾四人

但組頭共

御小人

式百八拾四人

但同断

御駕籠之者

七拾人

○

黒鋏之者

三百式人 △

内

御掃除之者

式拾九人

御参詣之節、御供名面并組人数書面之

右者来卯年四月日光山

通御座候、以上

寅十二月

黒鋏之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

○ 外人数拾人増申上置候

△ 内五人御幕長持持人之者江
増人奉願置候

黒鍬之者頭

上書

御中間頭

高・姓名并組人数書付

御小人頭

御駕籠之者頭

右美濃紙豎帳面式冊袋綴、上包無之

御中間頭江

安永度之通日光山 御参詣ニ付足並稽古申合致度旨御旗奉行申

聞候間、十月三日御旗指之者組頭兩人御旗奉行神尾豊後守宅江

晴雨共正九時罷出候様申聞候間、無遅刻豊後守宅江可被差出事

九月

浅野金之丞

右同廿九日森田甚太郎より差越、承付返却

御旗奉行

神尾豊後守組

朝倉播磨守

与力

同心組頭

式人 四人

同心 拾六人

御旗指組頭 式人

御旗指 拾五人

新組世話役 式人

新組 廿五人

右之通足並稽古之節人数罷出候間、別紙之通行列相立代り合足並稽古いたし候、依之別紙相添御達申候、已上

十月三日

神尾豊後守
朝倉播磨守

今三日正九時御旗奉行神尾豊後守宅江罷出候処、右御同人御逢被成日光御行列足並稽古申合可致旨被申渡候ニ付、両組与力面会之上申合仕無滞引取申候、此段御届申上候、以上

申合仕候者

豊後守組与力

鈴木源左衛門

播磨守組与力

関 小次郎

右之通ニ御座候、以上

十月三日

中山藤右衛門

覚

御中間組頭

中山藤右衛門

御旗指之者

小林新太郎

荒井利右衛門

熊沢新八郎

伊藤庄作

山県権左衛門

榴沢鉄三郎

和田小十郎
右之者日光御供足並稽古罷出候間、此段申上候、以上

覚

松永半左衛門組
御中間組頭
安川七平
御簾指之者
秋元作左衛門
岩瀬泉助
小野田弥太郎
田中八之丞
西山升太郎
森澄太郎作組
田畑門之丞
石島鉄五郎
中村保兵衛
右之通足並稽古之節罷出候旨、組頭藤左衛門相届ル^(右)

十月三日

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
江

安永度日光山 御参詣ニ付御行列 上覧之砌、御道具類持人并
宰領共巨細相認、且又御道具類請取方も何れよりと申儀、早々
取調可被申聞事

十月

浅野金之丞

右同十日当番所より差越、承付返却

書 上

日光山 御参詣ニ付御行列
上覧之節、御道具類宰領并
持人之儀取調候書付
御中間頭
畔柳丈之進
松永半左衛門
森澄太郎作

覚

一、御簾長持

三棹

一、御簾竿

但御簾指之者六人差添、持人新組

但御中間組頭式人・御簾指之者九人左右江相立申候、持人新組

一、御鎗六本之内

右御品共請取候節御簾同心取扱、御簾指之者者取扱不申候

御十文字

式本

御鍔鎗

式本

御拋鞘

式本

御直鎗

式本

但御持鎗之者拾八人之内一日拾式人宛相勤申候

右御品請取之儀者御細工所より請取申候

一、御神馬共 口附 七拾式人
御供馬 但壹疋ニ付三人宛
右口附之者御厩江罷出、御馬方差図請申候

進献
一、御長持 四番 三棹
五番 六番
宰領 御徒目付 五人 持人通し人足
右御品御当朝於陰土圭宰領御徒目付請取申候
壹番
一、御長持 貳番 三棹
三番
宰領 御徒目付 三人 持人黒鋏之者
右御品者宰領御徒目付取扱候間何方より請取候儀書留無御座候

一、御弓矢箱 壹棹
宰領 御中間 貳人 持人黒鋏之者
右御品何方より請取候哉旧記無御座候

一、棒差箱 壹棹
宰領 御中間 貳人 持人黒鋏之者
右御品前同断

一、御薬方御小簞笥 壹荷
宰領 御中間 壹人 持人新組
右御品前同断

一、御用之箱 壹荷
宰領 兼勤 持人新組
右御品前同断

一、御召方御長持 四棹
宰領 御中間 四人 持人通人足
右御品前同断

一、同断御小簞笥 壹荷
宰領 御中間 壹人 持人通人足
右御品前同断

一、御手水方御長持 壹棹
宰領 御中間 貳人 持人通人足
右御品前同断

一、御長刀 壹振
御鎗 壹本
宰領 御中間 壹人 持人通人足
右御品前同断

一、御小道具役御長持 壹棹
宰領 御中間 壹人 持人通人足
右御品前同断

一、御小道具役御長持 壹棹
宰領 御中間 貳人 持人通人足
右御品前同断

一、御小道具役兩掛挾箱 壹荷
宰領 御中間 貳人 持人通人足
右御品前同断

一、御次長持 拾五棹
宰領 御中間 六人 持人通人足
右御品前同断

一、御鎗	三拾本 但三包	
宰領	御中間	貳人 持人通人足
右御品前同断		
一、御半弓御長持	貳棹	
宰領	御中間	貳人 持人通人足
右御品前同断		
一、御水簞笥	壹荷	
宰領無御座候哉旧記無御座候		持人黒鍬之者
右御品前同断		
一、外御長持	四棹	
宰領	御中間	四人 持人何方より出候哉旧記無御座候
右御品前同断		
一、半長持	貳棹	
宰領	御中間	貳人 持人前同断
右御品前同断		
一、御丸弁当	壹荷	
宰領	御中間	貳人 持人前同断
右御品前同断		
一、御朱印御長持	壹棹	
宰領	御中間	貳人 持人前同断
一、御同朋方御用箱		
宰領	御中間	貳人 持人前同断
右御品前同断		

御召替	
一、御駕籠	壹挺
一、御轅	壹挺
一、御長持	貳棹
一、御清御挟箱	四走
一、御清御茶弁当	壹通
一、御手水方御長持	貳棹
一、御土圭	壹箱
一、御次長持	四棹
宰領	御徒目付
右御品前同断	御中間 五人 御小人目付差添、持人前同断
右之通御座候、御道具類何れより請取候哉相分不申、此段申上候、已上	
寅十月	御中間頭 畔柳丈之進 松永半左衛門 森澄太郎作
御中間頭江	
足並稽古之節罷出候御旗指之者人数書、早々可被差出候事	
十月	浅野金之丞
右同十四日被遣	
一、来四月日光山 御参詣ニ付御供御中間・御小人・御駕籠之者・黒鍬之者、申渡候様三蔵殿御達被成候事	
右十月十五日御口達	

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

一、熨斗目拾 七

一、綾縞拾 七

右御中間

一、熨斗目拾 拾六

一、綾縞拾 六

一、麻上下 壺具

一、素袍袴襦子脚半 亀井坊

右御小人

一、熨斗目拾 五拾

右御駕籠之者

右者来卯年四月日光山 御参詣之節新規御渡可被成旨伺相濟候間、

御断書早々可差出候事

十月

佐々木三藏
榊原主計頭

右同月十九日掛りより差越、三役承付返却

一、日光御用本掛之者、他場所江御役出等相願候者有之候共取次申

間敷旨、庄兵衛殿被申聞候段蒔田又三郎相達ス

右十月十九日

御中間頭
江

御簾指之者組頭
式人
御簾指之者
拾五人

右者明後廿五日光山 御参詣ニ付足並稽古於吹上 上覽所

稽古有之候間、正五半時竹橋御門内江相揃候様可被申渡候事

十月

浅野金之丞

右掛御徒目付小菅幸三郎相達ス、承付返却

御中間頭
御小人頭
江

日光 御参詣ニ付御中間・御小人御供、先達而差出候人数書帳
面之通式百人拾四人宛伺相濟候間、役々江御供可被申渡候事

十月

佐々木三藏
榊原主計頭

右十月廿三日御達

天保十四卯年四月日光
御宮 御参詣御供人数割

一、御中間組頭 四人内 式人松永方
式人此方

中山藤右衛門
笹川文左衛門

一、御供組頭 四人内 式人松永方
三人此方

一、御扶持賄役 四人内

式人松永方
式人此方

佐藤定藏
黒川善太郎
浅見孫兵衛

外ニ壹人森澄方より増

小金井長三郎
竹中次左衛門

一、御旗指之者 三拾八人内

拾壹人松永方
八人森澄方
拾九人此方

外三人森澄方足シ

荒井利右衛門
熊沢新八郎
伊藤庄作
横川瀬平
山本大次郎
中山伊八
太田又八
川目熊四郎
神谷一作

山県権左衛門
榴沢鉄三郎
和田小十郎
吉沢右内
石原源太左衛門
池田助左衛門
萩原才兵衛
岩崎繁三郎
神田忠作

一、御中間目付 貳拾七人内

八人松永方
五人森澄方
拾四人此方

永田忠左衛門
桜井甚五左衛門
山崎市十郎
河野貫作
藤村太一郎
伊藤新之助
川村清三郎
小川健吉

桜井源藏
平島市之助
中村伊之助
山崎孫三郎

飯役

永田林太郎
黒沢勇次郎

一、御持鎗役

拾八人内
六人松永方
三人森澄方
九人此方

一、御中間押

拾人内

三人松永方
貳人森澄方
五人此方

小宮山登一郎
高橋磯三郎

山口金左衛門
朝倉松五郎

一、野方御使

貳拾五人内

八人松永方
五人森澄方
拾貳人此方

三橋啓五郎
杉浦孫七
鈴木健平
竹中藤十郎
山口吉次郎

川目秀次郎
小沢勢十郎
橋本五四郎
船川小八
松本常次郎

一、御長持宰領

六拾人内

拾八人松永方
拾貳人森澄方
三拾人此方

鈴木由之助
羽田善作
関根三吉
長瀬邦次郎
和田金藏
高野作藏
関口彦作
橋本佐吉
荒井伝三郎
池谷錠太郎
山崎友太郎
塩沢彦太郎
小林友吉郎

高橋喜兵衛
野村幸次郎
江本駒次郎
小林藤兵衛
西村平作
鳥飼万七
斎藤九郎次
横川熊之助
鈴木益作
三浦竜次郎
小林徳十郎
寺山源六郎
三浦桂之助

過

鹿島権十郎
小川久五郎
柏原藤九郎
石掛清五郎
成島弥左衛門

安藤幾右衛門
小林小伝次

伊藤晴作
藤村伝十郎

四人此方

一、御馬髪卷役

貳人内
壹人松永方
壹人森澄方

河野平八郎
鈴木弥吉
高田幸三郎

一、御馬牽人

七拾貳人内
貳拾四人松永方
拾四人森澄方
三拾六人此方

一、手代り

四人内
壹人松永方
壹人森澄方
貳人此方

右大将様紅葉山御先練

宮川彦五郎
今井安五郎

右大将様御用扣

塩沢彦右衛門
田野村弥六
八木田茂吉

井田茂八郎
山形権之助
浅見常太郎
熊沢重五郎
寺山六次郎
和田源之丞
神谷留次郎
桜井久蔵
有賀角之助
風間新十郎
荒井惣八
鴨下岩次郎
岡部豊太郎
松本豊三郎
本島勇作
向田鉄太郎
加藤長之助
平島亀吉

山本金八
笹川周蔵
神田勝之助
小岩井佐之助
朝倉金之助
池谷金次郎
中山清太郎
小山清右衛門
川村弥三郎
石原甚平
岡部又左衛門
真壁豊五郎
秋元次郎助
斎藤佐太郎
田野村勝三郎
小金井六太郎
小林惣五郎

松永半左衛門組

御中間組頭

鈴木善左衛門
市川久平

御供組頭

田中彦兵衛

御扶持賄役

橋本甫太夫
松永清兵衛

一、荷宰領

八人内
貳人松永方
貳人森澄方
四人此方

御簾指之者

荒井賢蔵
三橋鉄蔵
深谷与十郎
三橋国三郎

一、舐番之者

八人内
貳人松永方
貳人森澄方

岩瀬泉助
萩原五右衛門
小野田弥太郎
田中市兵衛
田中八之丞
岸熊太郎

西山升太郎
沼崎金四郎
金田孫三郎
秋元作左衛門
園田惣左衛門

御中間目付
松永半六
松岡佐助
柳本文藏
小野忠藏
小林猪太郎
御持鎗之者
近藤惣次郎
吉田正三郎
吉野刀次郎
御中間押
高橋巳之助
小野鉄兵衛
野方御使
三橋喜平次
西村勝藏
清水房五郎
小野作吉
御中間
和田徳右衛門
吉田佐太郎
西村六之助
松岡徳次郎
平山壮三郎
水野三馬藏
田中祐三郎
土戸永四郎
神谷麓三郎
小俣千次郎
藤村清太郎
佐藤長六
金田万作
内山富五郎
林鉄太郎
下氏文之助
塚田菊三郎

飯役
金井充作
小林幸次郎
堀内銀次郎
清水福之助
神谷行次郎
鈴木鋸三郎
広瀬藤一郎
須田半之助
加藤熊藏
三橋鉄五郎
安達直三郎
鈴木隣十郎
川目泰助
田中彦作
松岡三平
林庄之助
尾関市三郎
園田平作
安川友次郎
高橋喜三郎
山本善藏
尾関鎌吉
白井市太郎
松永定四郎
山崎禎之助
柳貞太郎

代島幸三郎
鶴吉庄三郎
森源次郎
蘆田富八郎
佐藤孫助
御簾指之者
田畑門之丞
石島鉄五郎
中村保兵衛
尾崎長八郎
内山鎌四郎
御中間目付
小島東助
栗原清太郎
小沢喜太郎
斎藤茂八郎
原田惣次郎

黒川嘉兵衛組
御扶持賄役
石井徳兵衛
畔柳方より足
和田源次郎
石川定六
松永方より足
小野惣八
御持鎗役
石原清次郎
河原田治兵衛
藤原勝之助
掛り
長坂善次郎
柴沼三七
天笠鉢太郎
大野平一郎
御中間押
古沢一平
山田九十郎
大野金三郎
野方御使
高木伝五郎
柴田伝次郎
尾崎長作
渡辺益三郎
市川三作
加藤権次郎
中村啓次郎
河合忠三郎
小林金三郎

御中間

小島東作
青木庄作
鈴木勘助
畑八兵衛
小林彦八郎
清水鉾三郎
高橋幸作
真壁岩次郎
石島鉄太郎
梶田徳三郎
古谷俊三郎
長坂源作
倉本鉄次郎
牧田平次郎
石原金次郎
岡田儀右衛門
岡田長次郎

千田祐三郎
山本熊太郎
猪野伝平
太田金七
松永方より足
堀内十兵衛
畔柳方より足
永田友之助
池田栄三郎
並木竹次郎
山田常次郎
斎藤権十郎
生田峰松
野々村竹五郎
小泉金蔵
岡本金吾
吉野幸助
関口彦太郎

都合式百九拾人

八拾五人 松永方
五拾七人 黒川方
百四拾式人 此方

御中間頭
御駕籠之者頭 江

日光山 御参詣ニ付明廿五日於吹上 上覽所前通足並稽古被
為致旨申達候処、足並御用取扱浅野金之丞甲府勤番支配被 仰
付候ニ付延引いたし候、仍之申達候、以上

十月

中川勘三郎

右同廿五日掛小菅幸三郎差越、承付返却

一、日光 御旅館并三城 御泊之内御締之御門々々江戸表之通御門
帳相渡置申候、供通り・迎等其外共、江戸表ニ而御門出入仕候分
ハ印鑑証文にも不及罷通、夜ニ入候ハ、印鑑又ハ証文為差出通
候様仕、且 御旅館より罷出候者差出候品之儀、当番御目付
江相断、御門断仕相通可申候、尤品柄之義ハ昼ニ而も 御旅館江
不罷出、用事ニ而罷通候陪臣并雜人ハ主人証文を以相通可申候
右之通伺相済候間依之申達候事

十月

右同廿六日御達

(美濃)
初鹿野河内守
佐々木三蔵
榊原主計頭

一、日光山 御成之節諸向揃之儀、御供揃刻限より一時ニ早ニ有之
候事

一、小荷駄払之儀も御供揃時刻一時早ニ相払可申事

一、御幕奉行より一之御目付御使番迄、御供揃刻限半時早ニ建場江
相揃 御発駕ニ不構毎朝夜明候者出立可申事

一、御泊ニ而 御着被遊候迄御供開場ニ罷在 御着を相待罷在候様
可申候

一、御先之御側衆より御鎗奉行迄者御錠口明キ候而追付 出御被遊
候段、奥向より当番御目付江案内有之候ハ、御先之御側衆江申
遣出立被致候様、尤三ヶ所 御泊日光并 還御之節共右之通
有之候事

右之通伺相済候間依之申達候、以上

十月

初鹿野河内守
佐々木三蔵
榊原主計頭

右前同日御徒押より廻来ル、承付当番所江返却

御中間頭江

足並稽古替日明廿七日右御用取扱浅野金之丞代未被 仰付候ニ
付延引いたし候事

十月

佐々木三蔵

右同廿六日三蔵殿被遣、承付御用所江返却

一、来卯年日光 御参詣之節山内并 御休泊御賄、掛御代官より相
渡候積、薬缶・茶碗等御断被申上候処今般ハ格別ニ御省略被
仰出候儀ニ付減方位下等之御勘弁も可有之哉、何れも辺鄙之土
地柄故其品ニ寄江戸表より相廻り候趣有之、差還候而者差支候間
其向より追而御断被申上、品柄・員数等巨細御取調、来晦日迄被
御申聞候様いたし度、此段御懸合および候

寅九月

別紙書面九月中及御問合候処、同月廿七日御取調追而御申越可
被成旨御挨拶御座候処、此節掛御代官ニ而早々御挨拶有之候様
致度候

寅十月

右ハ十一月二日御目付衆江御勘定奉行・同吟味役名面ニ而差越ス、
五役承付掛江返却

来卯年四月日光山
御参詣ニ付請取候書付

御中間頭 式人

一、 椀	式具	
一、 折敷	式枚	
一、 食次	式ツ	
一、 杓子	壺本	
一、 釜	但蓋共 壺	
一、 鍋	同断 壺	
一、 桶	壺	
一、 柄杓	壺本	
一、 貝杓子	壺本	
一、 行灯	但小道具共 壺	
一、 味噌	六合	
一、 塩	壺合式勺	
一、 油	式合	
一、 薪	拾式束	
一、 薄縁	拾枚	
一、 蓆	拾枚	
一、 人足	壺人	
一、 椀	式百七拾五具	御中間
一、 折敷	式百七拾五枚	式百七拾五人分

一、食次	貳拾六	
一、杓子	貳拾六本	
一、釜	拾	但蓋共
一、鍋	貳拾六	同断
一、桶	四拾六	
一、柄杓	貳拾壹本	
一、貝杓子	貳拾六本	
一、行灯	拾	但小道具共
一、味噌	貳斗七升五合	
一、塩	五升五合	
一、薪	五百五拾束	
一、油	貳升	貳夜分
一、薄縁	貳百七拾五枚	
一、莛	貳百七拾五枚	
一、人足	三拾三人	

右者来卯年四月日光山 御参詣 御逗留中郡代方より請取候品書
面之通御座候、薬缶・茶碗等者請取不申候、右員数減方無御座候
御逗留中 御休泊御賄・御賦被下候節ハ平常遠 御成御供之
節之通ニ而差支無御座候、以上

寅十一月

御中間頭
畔柳丈之進
松永半左衛門
森澄太郎作

右半紙帳ニいたし御勘定奉行江掛御徒目付ヲ以差出ス

御中間頭江

来九日足並稽古有之候心得を以、御簾指之者罷出候姓名書明朝迄ニ可差出候事

十一月

追啓、日限之儀ハ伺済之上相達可申事

御中間頭江

明九日吹上於 上覧所前足並稽古有之候間、正五ツ半時御簾指之者竹橋御門内江可差遣事

十一月八日

右掛御徒目付木村岡太郎より差越、承付返却

覚

御簾指之者
小林新太郎
荒井利右衛門
熊沢新八郎
伊藤庄作

御中間組頭
中山藤右衛門

山形權左衛門
榴沢鉄太郎
和田小十郎

右之者日光御供足並稽古罷出候間、此段申上候、以上

覚

松永半左衛門組
御中間組頭
安川七平

御旗指之者

秋元作左衛門

岩瀬泉助

小野田弥太郎

田中八之丞

西山升太郎

森澄太郎作組

田畑門之丞

石島鉄五郎

中村保兵衛

右之通足並稽古罷出候旨、組頭藤右衛門相届ル

摂津守殿

内蔵助殿御達

日光御供之面々下々迄、晴雨共菅笠相用可申旨向々江可被相達候

十一月

右同十一日五役承付返却

越前守殿御渡

耀之助殿御達

日光 御成ニ付勤番之面々者仮養子願書可差出事

一、当日御供之面々者仮養子願書差出候ニ不及事

御徒目付組頭江

来卯年四月日光山 御参詣之節 御泊城 御昼休御注進

左之通

川口 御昼休

附人

御小人方

御成之節岩淵百人組番所前迄

一、御幕長持見之候由

錫杖寺江

但 還御之節者元郷村橋際迄、御幕長持見候由

同

一、御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節ハ元郷村橋際迄、御先之御側衆見候由

同

一、御先馬見候由

同断

但 還御之節ハ元郷村橋際迄、御先馬見候由

岩槻 御泊城

附人

御小人方

御成之節

一、上町口江御幕長持見候由 二丸江

但 還御之節ハ下町口江、御幕長持見候由

同

一、大手江御先之御側衆見候由 同断

但 還御之節も大手迄、御先之御側衆見候由

同

一、大手江御先馬見候由

同断

但 還御之節も大手迄、御先馬見候由

幸手 御昼休

附人

御小人方

御成之節幸手町入口迄

一、御幕長持見候由 聖福寺江

但 還御之節者内国府間村橋際迄、御幕長持見候由

同

一、御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節ハ内国府間村橋際迄、御先之御側衆見候由

同

一、御先馬見候由

同断

但 還御之節者内国府間村橋際迄、御先馬見候由

古河 御泊城

附人

御小人方

御成節

一、上町口江御幕長持見候由

二丸江

但

同

一、諏訪郭江御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節ハ大手迄、御先之御側衆見候由

同

一、諏訪郭江御先馬見候由

同断

但 還御之節ハ大手迄、御先馬見候由

小金井 御昼休

附人

御小人方

御成之節松原之内鳥居丹波守領分境迄

一、御幕長持見候由

慈眼寺

但 還御之節ハ小金井町入口迄、御幕長持見候由

同

一、御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節ハ小金井町入口迄、御先之御側衆見候由

同

一、御先馬見候由

同断

但 還御之節ハ小金井町入口迄、御先馬見候由

宇都宮 御泊城

附人

御小人方

御成之節

一、上町口江御幕長持見候由

二丸江

但 還御之節ハ下町口江、御幕長持見候由

同

一、大手江御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節ハ大手江、御先之御側衆見候由

同

一、大手御先馬見候由

同断

但 還御之節も大手江、御先馬見候由

大沢 御昼休

附人

御小人方

御成之節大沢町入口迄

一、御幕長持見候由

竜藏寺江

但 還御之節者大沢御殿地入口迄、御幕長持見候由

同

一、御先之御側衆見候由

同断

但 還御之節者御殿地入口迄、御先之御側衆見候由

同

一、御先馬見候由

同断

但 還御之節者大沢御殿地入口迄、御先馬見候由

日光山 着御

附人

御小人方

一、鉢石町江御幕長持見候由

御旅館江

一、同所江御先之御側衆見候由

同断

一、神橋外迄御先馬見候由

同断

江戸 着御

附人

御小人方

一、王子滝野川辺迄御幕長持見候由

御本丸江

一、駒込吉祥寺前迄御幕長持見候由

同断

一、稻葉丹後守屋敷前迄御幕長持見候由 同断
一、下乗橋迄 御先見候由 同断

右 御成 還御之節御道中筋并江戸 着御之節、書面之通相心得
可申候事

十一月

佐々木三蔵
榊原主計頭

来卯年四月日光
御宮 御靈屋 御参詣之節御注進

御成御注進

一、御轅ニ被為 召候由 御徒方 御宮江
御小人方

一、御轅ニ被為 召候由 御宮江
御小人方

一、御轅ニ被為 召候由 御徒方 御靈屋
御小人方

還御御注進

御靈屋ニ而 御徒方 御本坊江
御小人方

一、御轅ニ被為 召候由 御本坊江
御小人方

同 御轅ニ被為 召候由
右之通御注進相心得可申候事

十一月

佐々木三蔵
榊原主計頭

十一月廿七日当番所組頭依田源十郎より差越ス、但御注進書御小
人方与有之候得共御中間役前ニ付申渡ス

越前守殿御渡 大内藏殿御達

一、御代官金上納之儀日光 御参詣被 仰出候ニ付、当年ハ御差

延被下旨被 仰出候

右之趣向々江可相達候

覚

来卯年日光 御参詣御供之内

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人
御駕籠之者頭・組共

右者拝借有之候者無御座候、以上

寅十一月

四 役

右式通掛り江差出ス

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

日光山 御参詣ニ付御行列 上覽之節、江戸御出立之人数計

罷出、旅装束ニ而御行列相揃御駕籠・御道具共差出、騎馬ニ而御
供之分騎馬与定候人数召連候心得を以、人数書并御道具類共相

認一両日中差出可申事

十二月

桜井庄兵衛

右壺通掛より差越、五役承付返上

大目付江
御目付

日光 御参詣ニ付向々請取物等之儀ニ付書付差出候ハ、当月廿
日限并諸伺・臨時物之義者来卯年正月廿日限り取調、差出候様可
被達候

十二月

覚

御道具六筋
但御細工所より請取候

御中間頭
壹人

同組頭
貳人

同御供組頭
貳人

同御旗指之者
拾五人

同御持鍵之者
拾八人

御馬牽人
拾八人

御中間目付
貳人

同押
貳人

右之通御行列
上覧之節罷出申候、以上

寅十二月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

森澄太郎作

右同 日懸り江差出ス

越前守殿御渡

前々日光 御参詣之節御納戸組頭已下之面々江被下候人馬之儀、
関八州村々より寄置江戸并 御泊場所ニ而相渡候处、荷物持送り
不馴之者多道中及踰躪、且御供之内も旅行不案内之輩ハ自然貫
目之荷物も有之、貫目品引請候人足共江不及力捨置逃去候も不
少差支候哉ニ相聞候間、此度ハ村人馬相止道中筋事馴候者江受
負申付雇立相渡往返持通積候条、旅中持運弁利之ため可成丈駄
荷減候様可被取計事ニ付、馬壹疋人足貳人ニ引替候儀ハ勝手次
第二候得共、前以不被申立候而ハ雇入方差支候間、前々被下来候
人馬数并引替有無共、来月十日を限り馬喰町御用屋敷御代官役
所江書付可被差出候、右人馬泊有之おゐてハ其下宿敷近辺百姓
家等江差置、無左場所ハ前以請取方ニ而建添、簷下敷又ハ最寄江
小屋掛抔いたし候積、可成丈出立より帰府迄不掛離様為取計、
勿論人馬喰物等一式請負人共取極候間、召連候家来江も其旨心
得可為置候、尤成丈人足ハ貳人三人持或ハ五七人持之品も人数
減し、持通儀ハ勝手次第之旨請負共江申渡、出立前右手先之者相
廻り貫目見積候筈ニ付、人足壹人六貫目持、馬壹駄三十六貫目之
外、壹人ニ付壹貫目、壹駄貳貫目位迄ハ用捨いたし、其余過貫目
分ハ右受負人江相對之上増賃錢相渡候敷、又ハ増人足雇入候儀
等ハ是又勝手次第候、御時節前人馬之証文請取次第前書役所江
差出、其節出立日限等掛り御代官江可被談候

右之趣御納戸組頭已下前々人馬被下候御切米取之面々江可被相達
候

寅十一月

覚

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門

一、御伝馬

但人足四人ニ引替申度候
式正

一、御伝馬

但人足五拾六人ニ引替申度候
式拾八正

右ハ来卯年四月日光 御参詣ニ付請取申度奉存候、以上

寅十二月

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門

右老通郡代役所江組頭中山藤右衛門持参

郡代役所より達

向々出立前広人馬請負人川瀬石町米屋久右衛門・元大工町大津屋政吉・芝南新門前老丁目代地政田屋源兵衛手先之者屋敷々々江相廻り荷物貫目見積候上、御定之外馬荷ハ式貫目・歩行荷者老貫目程ハ其儘請取候得共、其余過貫目有之候得ハ増人馬御雇入可有之候、尤少分ハ儀ハ雇負人ども江御相對ニ而馬老正金七兩老分永五文、人足老人金貳兩三分永百七拾八文之割合を以増賃錢御渡之儀并増人馬雇入方も右之者共江被及御対談候歟、又ハ荷物貫目御減候共御勝手次第之事

但増賃錢・増人馬雇方等久右衛門外式人江御談有之候共、雇賃前金払無之候而ハ難被及御相談旨申出候間、兼而御心得可有之候事

一、人馬御証文御請取次第

御証文高

四月幾日出立

宿所

何役

何之誰家来

何之誰印

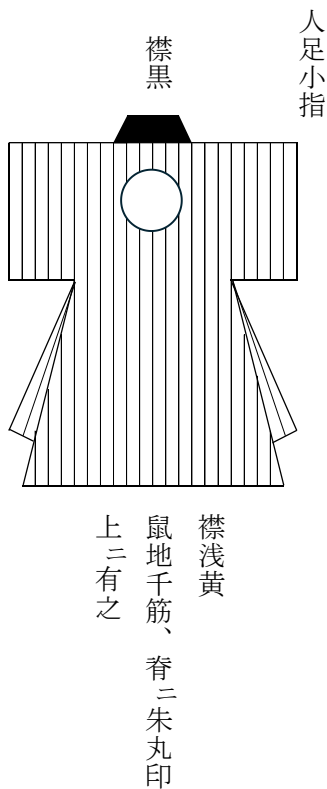
人足 何人
馬 何疋

右之通西之内紙半切ニ認御証文一同早速当調所江御差出有之候得者、其節御証文者留置、書替切手相渡候事

一、人足・馬士共何役何之誰持人與認候鑑札老人別腰ニ為提、向々出立前屋敷々々江請負人共より差配候間、人馬数御改之上右書替切手請負人江御渡可有之事

一、前御操入候人馬・賄方等一式請負之者引請取計候、尤人馬屋敷内江可被差置候場所御手当可有之事

一、人馬共途中おゐて若病氣其外差支之儀等出来候節ハ、掛役人取計候事ニハ候得共、野間等ニ而差掛り候節ハ



書替切手

人足	何人	何役
馬	何疋	何之誰

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

御道中御昼休ニ而御供中食事も大概済候時分拍子木打可申候間、
此段相達置候事

十二月

佐々木三蔵
榊原主計頭

日光 御参詣ニ付御簾指組頭四人・御簾指之者三拾八人罷出候
由、右人数御簾長持・御簾竿江何人附添候而隔日之勤候哉、御行
列 上覧人数書江書加へ候間及御掛合候、人数割其筋御取調
否御下札ヲ以被仰聞候様致度存候、以上

十二月十五日

神尾豊後守
朝倉播磨守

下ケ札

書面、日光 御参詣ニ付御簾指組頭四人・御簾指之者三
拾八人右人数安永度御旗奉行江引渡、尤御旗指組頭式
人・御旗指之者拾五人日々御供仕候与申書留有之、残御
旗指組頭式人・御旗指之者廿三人与代り合相勤候儀与
相心得申候

十二月六日

御中間頭

御徒目付組頭

来卯年日光 御参詣之節、支配向御道中筋御供勤方并 御泊
城 御昼休御先勤方、且 御宮 御靈屋 御参詣之節、御供・
御先勤方諸出役場所・勤方共諸向取調勤方之处書付可被差出候
但勤方之義ニ付諸書物・絵図等見置度儀も有之候ハ、掛御
徒目付江談候様可被致候、尤掛御徒目付江も其段申渡置候

十二月

佐々木三蔵
榊原主計頭

御目付衆江

町奉行
御勘定奉行

一、来卯年日光山 御参詣被 仰出候ニ付、御蔵米取御供之面々前
度入用金安利年賦ニ而用立度旨札差共申立候間、越前守殿江伺之
上願之通申渡候

一、右用立金割合之義ハ、本高・御足高・御役料御扶持方之次第ニ応
し是迄之借用高ニ不拘安利年賦用立候積、割合之儀ハ札差共見
世江も書付為張出置候間、割合猶難相分儀者猿屋町貸附会所江家
来差出、町奉行・御勘定奉行支配向之者江問合可申候事
右割合之外ニ而も相応之金高迄ハ相對ニ而無差支用立候積、尤不
相当之掛合者相断候筈ニ候事

右之通為御心得御達申候、御支配向江御申渡候様存候、以上

寅十二月

越前守殿御渡被成候御書付写申達候事

十二月

松平豊前守
佐々木三蔵
榊原主計頭

前々日光 御参詣之節、御供并御用掛之面々領分・知行より可
召呼人馬、御切米取之輩同様御府内ニ而雇入候向多趣ニ相聞、安
永度者伊奈半左衛門掛ニ而、往返通人馬請負之者吟味いたし直段
為相立銘々勝手次第雇入候様申達候処、諸家手限ニ而相對出来
候哉、右請負人より相雇候向者事済、既ニ享保度迄者右様之取計
方も無之候間此度者一統相對雇之積、尤御納戸組頭已下前々人
馬被下候御切米取之向々ニ而も、右被下人馬之外自分雇之分者是
又江戸より日光迄往返通継送り之筈ニ候条、都而手限可致相對
歟、万一途中病人馬出来実々差支候ハ、取計方之儀其節御勘定
奉行可問合事

一、通馬之義ハ先々ニ而繫置候ニも場所を取、其上病馬ニ成候節取
扱手数相掛候間、都而諸荷物手輕ニいたし候儀ハ勿論、成丈両
掛挟箱等壱人持之歩行荷ニいたし、実々無抛分ハ長持ニいたし
駄荷相減候様可取計事

一、道中筋多分之人馬ニ而往来混雜いたし、先年者荷物延着御規式
并拜礼等ニ可用品々差支候向も有之候由ニ付、彼地ニおゐて入
用之品々ハ可成丈手操いたし、御発駕一兩日已前より差立候儀
勝手次第之事

右之趣 御参詣御用掛御供之面々江可被為達候

十二月

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

摂津守殿御渡御書付写申達候事

十二月

佐々木三蔵
榊原主計頭

一、今度日光 御成之刻於道中自然 御駕籠之あたり狼藉者・氣違
など有之者、御側御供ニ参候ものへ内左右をわから其方ニ供奉
之者可計之、然ハ大勢不参候様可仕事ニも不成儀ニ大勢掛集
御駕籠之あたり明候ハ、越度ニ可被 思召之旨 御意候、
又 御先・御跡ニ而狼藉者・氣違等有之候共一切掛付不申、御
下知を相待 御意次第ニ可仕、若右之通於無之ハ如何様之儀仕
候共其者之可為越度旨 御意之事

一、御供之騎馬之内江狼藉者・氣違等於来者 其所ニ有合面々可計之、
為差儀無之所々大勢集騎馬混雜仕候ハ、可為越度 御先ニ有
之面々可為同前、見合馬より下立可相待 御意之事

一、御成之道筋見物之輩余り 御通近不罷出候様ニ御先江参り候御
歩行頭見計之可申付旨物語可申渡候事

一、御歩行頭・小十人頭・御腰物持・御菓込・小十人組御供之儀、
道中御左右を相定自然目安抔捧候もの有之候ハ、其方ニ罷在
候者取扱可申候、大勢寄集申間敷 御意之事

以上

右御書付之趣享保・安永之度者相達候条、此度も何も其心得ニ而
可有之候得共、無急度向々江相通し置候様越前守殿ニも被存候事

佐々木三藏殿
榊原主計頭殿

跡部能登守
梶野土佐守

御中間頭畔柳丈之進外耆人日光御用ニ付、御証文願書面之内御
中間頭耆人江馬耆正ツ、被下候儀ハ先例之通ニ候哉、且御中間
式百八十四人江馬式拾八疋被下候儀、是又同様ニ候哉、人数之義
ハ今般御同済之事ニ候哉、安永度之人数共承知いたし度早々御
挨拶有之候様存候、此段及御問合候

十二月

書面御中間頭式人江馬式正ツ、御中間式百八拾四人江
馬式拾八疋、安永度之通人数之儀ハ今般右之通被仰渡候
十二月
御中間頭

来卯年四月日光山
御宮江 御参詣之節勤方帳

御中間方

来卯年四月日光 御参詣之節勤方左之通御座候

御供人数

御中間頭

右者御供耆人ツ、仕 御昼休ニ而代り合相勤 御旅館泊不仕候
式 人

御中間組頭

四 人

右ハ御旗奉行江引渡御行列ニ相立代り合御供仕 御旅館泊不仕
候

御中間御供組頭

四 人

右ハ御中間頭之跡ニ附平生 御成之節之通耆人ツ、御供仕
御昼休ニ而代り合相勤 御旅館江耆人ツ、泊申候

同断御旗指之者

三拾八人

右ハ御旗奉行江引渡拾五人ツ、御供仕 御昼休ニ而代り合、手代
共一日三拾八人ツ、御供仕 御旅館泊不仕候

同断目付

人

右ハ御供并 御先勤等、御小人目付申合相勤 御旅館江式人ツ
、泊申候

同断押

拾 人

右者五人宛代り合同勢先相勤 御旅館泊り者不仕候

同断野方御使

式拾五人

右者 御先御注進相勤 御旅館泊不仕候

同断御持鎗之者

拾八人

右ハ拾式人ツ、代合御供仕 御旅館泊六人仕候

同断御馬口附
七拾式人
右ハ御馬老疋ニ三人宛ニ而、御馬方差図請相勤申候

同断御馬髮卷之者
式人
右ハ御馬方差図請相勤 御旅館御厩江泊申候

同断宰領
六拾人
右ハ諸御長持并御道具江附添相勤申候

同断仲ヶ間荷才領
八人
右ハ仲ヶ間荷物江附添風雨之節世話いたし其外差引等申付置候

同断触番
八人
右ハ万一病人等出来候歟又ハ諸方江手代ニ差遣、又ハ触為知等有之節為相勤申候

同断書役
四人
右ハ御中間頭泊り宿江相詰認物等有之候得ハ相認、昼者手代リニ

同断扶持賄役
四人
も遣ひ万端用意ニ仕置申候

右ハ 御昼休并 御旅館江も相廻り諸事致世話、組中之賄方行届候様為仕候

但右賄役ハ前以彼地迄差遣 御旅館泊々江も為立寄、惣人数之旅宿等相改、朝夕喰事無差支様兼而相談置、猶又御供之節も御先江罷越世話為致候積ニ御坐候

右之通御座候、以上

寅十二月

右老冊掛榊原榮五郎ヲ以差出ス

御中間頭

御徒目付組頭
火之番組頭 江

日光御山中御締り、先達而主人証文ヲ以可相通旨被仰渡、且往来改方之儀伺相済申達置候处、十七日夜より宇都宮御先江罷立候面々家来先立等之者、主人証文ニ而相通候而者彼是手間取混雜も可致候間、右之分計十七日暮六ツ時より主人不及証文姓名承糺相通可申候、且栗橋 御関所之儀も前広御供之面々、鉄炮是又相通可申候

右之通伺相済候間申達候事

十二月

佐々木三藏
榊原主計頭

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

日光 御参詣ニ付御行列 上覽之節

一、晴天ニ候ハ、笠相用不申候事

一、曇候ハ、雨具腰付、笠ハ手ニ持可申事

一、雨降出候而御駕籠江雨覆掛候程之儀ニ候ハ、上覽所前江出候分其儘差出、操出候節御行列之程合有之候場所より雨具着用可致候、尤天氣宜相成候ハ、同様之手続ニ候事

右之趣伺相済候間此段相達候事

十二月

桜井庄兵衛

右庄兵衛殿被遣承附、同月十八日返上

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

日光山 御参詣御行列 上覧之節御当朝若病氣差合等御座候ハ
、其段 上覧所江出役いたし候同役江可被申聞候事

十二月

桜井庄兵衛

日光山 御参詣ニ付御行列 上覧之節歩行御供之ものゝ家来并
御行列不相立同勢之義ハ神田橋御門外鎌倉河岸边江操込可被申
候、尤御徒押・御小人押附置差引いたし候、依之申達候事

十二月

桜井庄兵衛

御徒目付組頭
火之番組頭
江

摂津守殿御渡御書付写申達候事

十二月

佐々木三蔵
榊原主計頭

来卯年日光 御参詣ニ付勤番并御供御用掛之面々、諸拝借有之
候分者御用捨ヲ以当暮上納之分御差延被下候、御勘定奉行可被
談候

右之通可被相触候

十二月

右同月廿三日当番所より差越、承附御徒押江相廻ス

御徒目付組頭江

日光 御参詣ニ付御行列 上覧之節手続左之通有之候

一、御行列 上覧之節江戸御出立之人数計罷出、旅装束ニ而御行列相
揃御駕籠并御道具共差出、騎馬ニ而御供之分騎馬ニ而御定之人数
召連可申候

但御駕籠并御道具者半蔵御門内江相廻置御行列之内江操入、矢

来御門辺ニ而拙者共見計開候事

一、同断之節ハ多人数ニも有之候間、頭・組共神田橋御門外・一ツ橋
御門外明キ地并御堀端江相揃、御堀端通り元飯田町より中坂江上
り田安御門御堀端通り、半蔵御門江入代官町通り 上覧所通り
行列仕竹橋御門江出、夫より平川口御門外・神田橋御門江出、前
書神田橋御門外・一ツ橋御門外江集可申候

一、同断之節も日光御供之御目付・足並御用懸り御目付・御使番共
騎馬ニ而罷出候

一、神田橋御門より一橋御門外明キ地并御堀端向ニ揃場所江札建有之
候

一、往来者人留ニ而有之候得共、御用向等ニ而罷通候者者御徒目付・
御小人目付差図いたし相通候事

一、日光 御参詣ニ付御供之面々之内、七拾歳已上之者ハ駕籠ニ而御
供仕候様先達而被仰渡候間、足並御行列 上覧之節も駕籠ニ而罷
出候而も不苦旨被仰渡候、先達而被仰渡候御書付之趣ニ相心得候
事

一、御旅行之御振合ヲ以御行列人数相揃候砌ハ拍子木相用候間、其節組々人数順達置、夫より足並掛御目付并御使番とも扇之合図いたし候節、御先より順ニ操出候事

十二月

桜井庄兵衛

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

当四月日光 御宮 御参詣之節旅宿別紙之通伺相済候、且日光并 御泊三城共此節より旅宿見置之者差遣候而も差支無之候、依之申達候事

正月

岩槻

諏訪庄右衛門
中川勘三郎

黒鋏之者頭

市宿町西側

甚兵衛
源太郎

旦過町

御取建小屋之内

黒鋏之者

宿 黒鋏之者頭一所

横町北側

十次郎

明家より

甚兵衛迄

五軒

御中間目付

同所南側

源次

御中間押
但宿御徒押一所

御中間

御小人頭

御小人目付

御小人押

御小人

御駕籠之者頭
御駕籠之者

古河

黒鋏之者頭
黒鋏之者とも

新町西側

清右衛門
良哲

旦過町

御取建小屋之内

黒鋏之者頭一所

宿 御中間目付一所

宿 御中間押一所

旦過町

御取建小屋之内

大工町西側

伊之助より
重右衛門迄

六軒

鍛冶町北側

平左衛門より
仙五郎迄

十三軒

同町同側

兵藏より
勘右衛門迄

四軒

鍛冶町北側

彦六より
長吉迄

五軒

曲尺手南側

新兵衛より
長吉迄

五軒

御中間頭
御中間
御中間目付
御中間押
但宿御徒押一所
御小人頭
御小人目付
御小人押
御駕籠之者頭

雀宮西側
足輕屋鋪
長谷觀音前
足輕屋敷
江戸町南側
四郎次より
弥次兵衛迄
三軒
鍛冶町北側
幸藏より
勘助迄
九軒
同所同断
弥太郎より
弥右衛門持
明屋迄
三軒
東鷹匠町
足輕屋敷
同町
足輕屋敷
台町
桂昌寺
覺泉院
并門前町屋
同町
新五兵衛より
善八迄
八軒
宿御中間目付一所
宿御中間押一所
紺屋町東側
卯兵衛
御駕籠之者
宇都宮
黒鋏之者頭
黒鋏之者
御中間頭
御中間目付
御中間押
但宿御徒押一所

長右衛門
同所西側
吉五郎より
田町東側江折廻し
弥助迄
拾式軒
新田町西側
喜助より
徳兵衛迄
拾式軒
同町東側
桂昌寺門前
佐市より
与兵衛迄
拾軒
同町同側
与市より
栄藏迄
四軒
曲師町南側
きのより
佐七迄
三軒
伝馬町北側
理右衛門より
池上町同断
安兵衛迄
八軒
曲師町西側
吉藏より
仲右衛門
後家迄
五軒

御中間

御小人頭

御小人目付

御小人押

御小人

材木町南側

春庵より

同町東側江折廻し

三郎右衛門

後家迄

拾老軒

小伝馬町北側

半兵衛より

池上町裏町同側

新藏迄

式拾軒

宿 御中間頭一所

宿 御中間目付一所

宿 御中間押一所

曲師町南側

松岩寺より

善太郎迄

六軒

同町北側より

鉄炮町東側江折廻シ

栄次より

清兵衛迄

拾三軒

江野町北側

吉藏より

喜之助迄

三軒

鉄炮町西側

吉右衛門より

幸助迄

四軒

同所横町北側

左吉

并明家共

御駕籠之者頭
御駕籠之者共

日光

黒鍬之者頭

黒鍬之者

御中間頭
御中間共

御中間目付

御中間押

御小人頭

御小人目付

御小人押

御小人

鉄炮町東側

佐吉より

久右衛門迄

五軒

同町南側

忠兵衛

石屋町北側

留藏

板挽町横町南側

富藏

原町横町

甚藏より

柴田林平迄

四軒

御殿地之内

居小屋

下本町南側

奥野惣助より

善六迄

三軒

下大工町横町

鈴木右源次

下鉢石町北側

山口丈喜

宿 御中間目付一所

宿 御中間押一所

四軒町北側

村上留助より

金谷主税迄

五軒

原町北側

忠吉

御駕籠之者頭

御駕籠之者

脇宿

右之通御座候、以上

覚

一、日光御道中御旅宿江相詰輩不殘可為旅装束候事

一、於御泊城主御礼之刻城主并御奏者番・御給仕之御小姓長袴、
其外ハ旅装束たるへき事
但進物番も可為長袴候

一、十六日日光 御着之刻 御目見ニ罷在候面々・且又於御番所前

御目見仕候輩并家来共可為旅装束候事

一、十七日 御参詣前者江戸ニ而 御参詣之時之通、惣躰可為熨斗
目半袴候 御参詣相済候ハ、可為旅装束候事

一、例幣使 御目見且又日光准后・同新宮 御対顔之時ハ披露高家
可為長袴候事

但例幣使江被下物之時、進物番可為長袴候

袋町南側

忠五郎後家

みよ

芳弥

中本町北側

吉藏

四軒町南側

小田平藏

今市宿東側

幸七より

喜右衛門迄

拾四軒

同所西側

小四郎より

長藏迄
拾壹軒

右之通向々江可被相達候

此分日光山御供之面々於御山下宿之外江家来等用なくして不可
出候、若無扨用事有之於差出ハ主人以証文御番所可通之、此旨
寄々可被達候

但主人召連候而罷通候者断次第たるへく事

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

越前守殿・摂津守殿御渡候御書付拾通差遣候、可得其意候、以
上

十二月

岡村丹後守
佐々木三藏
榊原主計頭

覚

一、日光御山中并 御泊之城々大手門内馬上停止之事

一、日光 御旅館迄締切之木戸々々下乗之内之通可相心得事

一、御山口々暮時閉之、明六時可開事

右之通日光江被相越候面々江不洩様可有通達候

日光 御参詣 還御已後拝礼之節 御先并供奉行列之面々者其
儘其装束たるへく候、勤番并其外之面々者熨斗目拾半袴可為着
用候

右之通可被相触候

十二月

此度於日光 御宮 御靈屋拝礼之面々御太刀目録并御馬代等
拝礼已前大楽院・竜光院江相納候様可被致候、且又拝礼之面々奉
幣神酒頂戴無之候

右之趣向々江可被相触候

十二月

覚

一、日光 御供之内 御先番之面々者勝手次第、四月十二日之曉寅
之刻迄之内不残立払候様ニ可仕候事

一、御道中 御泊々より 御先江罷立候面々者、亥刻より段々罷立丑
刻迄ニ立払候様可仕事

一、御跡より立候面々ハ松平市正人数より先江不参様可仕候事

右之通向々江可被相達候

十二月

覚

一、日光御道中歩行御供之外ハ、騎馬共羽織袴可為着用候事

一、御供之面々并召仕之者、火事道具持参ニ不及候事

右之通可被達置候

覚

今度御道中曇候而降可申与存候程之節ハ、御供中馬上・歩行立共
ニ不目立様ニ桐油腰附ニ可致候、尤晴天之時ハ附候ニ不及候、且
又致雨具罷出中途ニ而晴候ハ、見合腰附ニ可仕事

但下々共ニ合羽腰附右同断之事
右之通日光御供之面々江可被相触候

覚

一、諸同心

一、御中間

一、御小人

一、御駕籠之者

一、御馬口附之者并御馬飼中間

一、奥表并御膳所且御賄六尺・新組小間遣

一、御露路之者

一、黒鍬之者

右日光御供ニ付木錢一日老人ニ付拾七文ツ、被下候間 還御已
後可被請取候、尤跡部能登守・梶野土佐守・根本善左衛門江可被
談候

右之通可被相触候

来年四月日光御供御用掛之面々万石已下江分限ニ応し御扶持方
被下候間、右御扶持方渡方之儀ハ平扶持之積ヲ以日数九日分浅
草御藏より相渡候筈ニ候間、来二月中御勘定所江請取手形差出
御用掛御勘定組頭裏判取之、三月中勝手次第請取候様可致候
一、先年於日光塩・味噌・薪相渡候分江ハ此度も同様相渡候筈ニ候
間、日光表御賄御用掛御代官より請取候様可致候
右之通被相心得請取方之儀ハ跡部能登守・梶野土佐守・根本善

左衛門江可被承合候

右之通可被相触候

十二月

越前守殿

大内蔵殿

来年四月十二日夜酉刻より翌十三日 御成相濟候迄ハ御用ハ
(奉力)
供達之面々供廻同勢之外ハ一切 御成御道筋往来相留候間其旨
可相心得候事

但急病ニ而医師等之儀ハ人留之場所江断立呼寄可申候

一、御役又ハ御番等ニ而 御城江罷出面々 御成御道筋ニ屋鋪有之
分も出宅いたし早速脇道江罷出相通へし、其外之輩ハ猶以不可
被致往来候事

一、還御之節も廿一日卯之刻より人留可申候、前条之通可被相心得
候事

右之趣向々江可被相達候

十二月

越前守殿

大内蔵殿

一、此度日光 御成道中筋領分有之面々、又ハ近辺より老中・若年
寄中其外江為見廻使者・飛札使等被差越候者不及申用事之ため
家来等差出候儀も堅可為無用候

一、御代官等道筋江罷出逢候儀、且又手代等差出候事も右ニ准可為
無用候、尤寺院等も同前ニ相心得一切見廻等仕間敷候事

右之通可被申達候

当四月日光 御成之節

右日光并三城 御旅館ニ而御料理可被下候

御徒目付組頭
火之番組頭
表火之番

右日光并三城 御旅館ニ而御料理 御休息所ニ而者昼御配被下候
事 御徒目付

右ハ 御昼休之節町屋ニ而御配可被下候分
御貝太鞍役
御徒押
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
御中間
御小人
御駕籠之者
黒鋏之者

右ハ三城ニ而ハ御代官御賄屋敷ニ而被下候、尤日光ニ而者 御
旅館ニ而被下候事
御徒押
御挑灯奉行
御中間
御小人
御駕籠之者
黒鋏之者

右之通被仰渡候間申達候事

正月

岡村丹後守
佐々木三蔵
榊原主計頭

覚

御中間目付合
御小人目付合

貳拾人

御参詣掛

御中間目付合
御小人目付合

拾貳人

御中間押合
御小人押合

拾人

御玄關番

六人

御中間御持鎗之者

六人

同断野方御使之者

七人

御小人

七拾八人

右者来卯年四月日光山 御宮 御靈屋 御参詣之節右人数之

通御供・御先勤出役等仕候間清服羽織為請取申度奉存候、尤安
永度請取候書留ハ相見ヘ不申候得共別紙例書ニ申上候通紅葉山

御参詣之節ニ而も御清羽織為請取申候間、日光山 御宮之儀

ハ格別之御場所柄ニも御座候ニ付、前書之通為請取申度奉存候、

尤御中間・御小人貳百八拾四人宛之人数之内 江御中間百三十三・

御小人九十五単羽織為請取候得共、是ハ全右人数之内ニ平日御

役羽織着用無之者并切損甚見苦敷相成候者共江計為請取申候間、

過半平日相用候羽織ニ而別段請取不申、殊ニ御道中御供も仕自然

風雨等も有之候得ハ見苦敷相成候間、全 御宮 御靈屋之御行

列ニ相立候者共江為請取申度、此段奉願候、以上

寅十二月

御中間頭
御小人頭

覚

当四月日光 御参詣之節御中間・御小人・黒鋏之者江菅笠為請
取申度段奉願候処、例無之候ニ付不相成様被仰渡候儀を強而奉
願候義ハ何共奉恐入候得共、御中間方ニ者享保・安永度共桐油・
菅笠共請取候与申書留も有之、且者此度も桐油・脚半共御渡被成
下置候得ハ小給之者ハ多人数ニ而申合も不行届、笠区々相成候而
ハ見苦敷哉ニも存奉恐入候間、御行列之儀故可相成御儀ニ御座
候ハ、笠も相揃候様ニ仕御供為仕度奉存、此段奉願候、已上

卯正月

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭

書面之もの江願之通菅笠被下候間改而可差出候、
尤外之響ニ不相成様可被心得候事

御中間

貳百八拾四人

右ハ不殘御賄・御配共被下候哉、又ハ安永度之振合を以書出候

分計 江被下候哉

一、右御賄・御配被下候分 江者旅御扶持ハ不被下候事ニ候哉御問合申
度奉存候、以上

卯正月

御中間頭

下ケ札

書面御賄・御配被下方 御休所ニ而者式百八拾四人、
御泊所ニ而ハ九人被下候安永度書留有之候、旅御扶
持方者式百八十四人被下候、此段及御答候
卯正月

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

当四月日光 御宮 御参詣之節罷越候向々、為小宿割家来等
早々出立為致宿主江掛合之上賄代金半金相渡置、殘金之儀ハ
還御之砌相渡可申、尤非分之儀無之様書付取置可申段向々江可
相達旨被仰渡候、依之申達候事

二月

諏訪庄右衛門
中川勘三郎

右掛より差越、承附返却

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

越前守殿被成御渡候御書付式通相達候事

二月

岡村丹後守
佐々木三蔵
榊原主計頭

当四月日光御供之面々之内前々人馬相渡候分江者此度も被下候
間先年之通証文可出候条、人馬請取候分ハ別紙振合之通ニいた
し、其向々より二月十五日迄ニ可被書出候、尤地方之分ハ除之、
御納戸組頭已下御切米取之分并前々人馬被下候分計可被書出候
正月

証文案

覚

人足 何人

何役

馬 何疋

何之誰

右之人馬從江戸日光迄往返持通之積、馬喰町御用屋敷おゐて請
取之、此証文關保右衛門方江可相渡者也

卯月 越前

右御書付主計頭殿御達、四役承付返上

覚

馬 三拾疋

畔柳丈之進組
松永半左衛門組
御中間式百八拾四人
頭式人共

右之馬從江戸日光迄往返持通之積、於馬喰町御用屋敷請取之、
此証文關保右衛門方江可相渡者也

卯月 越前

右美濃紙式ツ折ニ相認老通掛り江

覺

御中間組頭

四人

御中間目付

五人

御中間押

一人

御中間

四拾五人

右之通日光山 御参詣之節御行列ニ罷出申候、以上

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

黒川嘉兵衛

卯二月

右式通半切紙ニ認掛り江差出ス

ヒレ

本紙程村紙江相認美濃紙ニ而写三通ツ、相添此案文共御勘定所江御差出可有之候、尤御支配向人数入狂ひ等有之候ハ、増減御認直御差出可有之候

請取申金銀之事

黒鍬之者頭

鈴木宇右衛門

御中間頭

畔柳丈之進

同

松永半左衛門

御小人頭

柳田勝太郎

- 一、銀拾枚
- 一、銀拾枚
- 一、銀拾枚
- 一、銀拾枚

一、銀拾枚

同

船川多四郎

御駕籠之者頭

菊地官左衛門

同

中山賀一郎

同

小山仁左衛門

御中間組頭

八人

但老人ニ付五枚宛

御小人組頭

七人

但老人ニ付五枚宛

御中間

式百七拾六人

但老人ニ付式兩宛

御小人

式百七拾七人

但老人ニ付式兩宛

御駕籠之者

七拾四人

但老人ニ付式兩宛

黒鍬之者

三百式人

但老人ニ付式枚宛

一、銀六百四枚

合 金千式百五拾四兩
銀七百五拾九枚

此目三拾貳貫六百三拾七匁

右是者今度日光 御成之節御供仕候ニ付致拝領、請取申所仍如件

天保十四卯年二月

御駕籠之者頭

小山仁左衛門

印

中山賀一郎

印

菊地官左衛門

印

御小人頭

船川多四郎

印

柳田勝太郎

印

御中間頭

松永半左衛門

印

畔柳丈之進

印

黒鍬之者頭

鈴木宇右衛門

印

小田又藏殿

馬場藤五郎殿

山本雄三郎殿

高橋儀左衛門殿

右之通相違無御座候、以上

佐々木三藏

榊原主計頭

印

印

表書之金千弍百五拾四兩銀三拾弍貫六百三拾七匁可被相渡候、

断者本文有之候、以上

金ノ四百九拾八兩老分銀老匁六分

卯二月

石原孫助

印

御用ニ付無印形

羽田竜助

印

川村清兵衛

印

根本善左衛門

印

無出座

井上備前守

印

岡本近江守

印

公事方無印形

戸川播磨守

印

梶野土佐守

印

御金奉行中

跡部能登守
越前

印

右之通相認二月十日掛り江差出ス、尤御勘定所其外扣四通美濃紙
ニ相認、内老通本紙之通裏書相認御金藏庭帳ニ差出ス、同月廿四日
御金相渡候ニ付組頭・賄役老人ツ、罷出請取候事

一、御紋附弓張御挑灯

八丸

六張

一、蠟燭

但下拾匁掛

弍百拾六挺

右ハ当四月日光山 御宮 御参詣之節、御注進御中間・野方御

使之者朝夜拾弍挺ツ、日数九日分合書面之通為請取申度奉存候、

尤安永度之書留ニ者相見不申候得共、不案内之御道中故御挑灯

無御座万一御注進之御差支ニ相成候而者奉恐入候間、兼而御用意

之為為請取置候様仕度奉存候、勿論 還御之上御挑灯并蠟燭遣

残共返納仕候間、此段奉願候、以上

卯二月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

黒川嘉兵衛

右老通同月十三日掛江差出ス

覚

伺之通弓張御挑灯六張・蠟燭弍百拾六挺可相渡候間

断書可差出候事

右同月 日撰津守殿被仰渡候旨、三藏殿被申渡候

来ル四月日光 御参詣ニ付、日光并古河・宇都宮・岩槻小宿割
御供之者共食事為手当日彼地江組役之者共差遣申候間、城主
々々并社奉行江被 仰渡被下候様仕度奉存候、且食事手当之
儀右宿々与直段相立申付候得共、猶又差支無之様城主并御代官
よりも申渡御座候様仕度奉存候、此段申上候、以上
卯二月

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

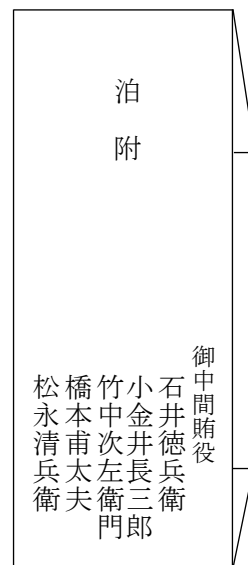
右老通同十三日掛り江差出ス



一、人足
覚

右ハ從江戸日光迄当四月 御参詣ニ付御中間為小宿割罷越候
間、宿々無遅滞人足継立、川越渡舟等入念可被申候、以上
卯二月
御中間賄役
松永清兵衛
橋本甫太夫
印 印

追啓、此先触宇都宮問屋江拙者共参着迄留置、可被差返候
宿々問屋中
村々
竹中次左衛門
小金井長三郎
石井徳兵衛
印 印 印



覚

二月十七日 岩 槻
二月十八日 古 河
二月十九日 宇 都 宮

右三ヶ所小宿割いたし候ニ付拙者共宿之儀手当可有之候、以上

卯二月

御中間賄役
松永清兵衛
橋本甫太夫
竹中次左衛門
小金井長三郎
石井徳兵衛
宿々問屋中
印 印 印 印 印

覚

畔柳丈之進組
御中間賄役

小金井長三郎
竹中次左衛門

松永半左衛門組

同断

橋本甫太夫

松永清兵衛

黒川嘉兵衛組

同断

石井徳兵衛

右之者共先達而為小宿割差遣候処日光表当月廿三日出立、道中
無滞昨廿七日川口通り着仕候、依之御届申上候、已上

卯二月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

黒川嘉兵衛

右老通御部屋栄佐を以上ル、尤出立之節も右之振合を以申上候事

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭 江

御駕籠之者頭

越前守殿御渡候御書付写申達候事

正月

岡村丹後守

佐々木三蔵

榊原主計頭

日光 御在山中并御道中ニ而目安訴詔出候共不及取上、江戸

奉行所迄出候旨申聞取上申間敷候

右之通向々江可被達候、以上

正月

右四役承附いたし返上

覚

御中間押合
御小人押合 式人

右者当四月日光 御参詣之節三城 御泊、日光 御旅館ニ而御

配御料理被下候様御断被 仰渡可被下候、以上

卯二月

御中間頭
御小人頭

右老通掛江同月十三日差出ス

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

日光御供之頭・組共名面明日中可被差出候事

正月十七日

佐々木三蔵
榊原主計頭

右掛より差越、右御供組頭名面書前々認有之候間略ス、但即日差
出ス

日光御供

黒楸之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

越前守殿被成御渡候御書付写、相達候事

正月

日光御供之面々江金銀被下候、諸事儉約可被用旨布衣已下之面々江可被達候

正月

右掛差越、承附返上

御中間頭
御小人頭

日光山 御参詣御出立之節、御行列江相立候御中間・御小人何人罷出候哉否早々取調可被申聞候事

二月

右掛より差越、両役承附返却

覚

御中間組頭
四人

御中間御持鎗之者
拾八人

御中間目付

五人

御簾指之者

拾六人

御中間押

壹人

御馬牽人

拾五人

右之通御行列 上覧之節差出申候、依之此段申上候、已上

二月

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門
黒川嘉兵衛

御供之内

御幕長持之先

御徒目付

壹人

御具足宰領

御徒目付

壹人

御召馬之先

御徒目付

壹人

一之御目付御使番次

御小人目付

壹人

撰津守殿家来老騎跡

御小人目付

貳人

御徒押

壹人

御小人押

貳人

右者日光山 御参詣三付三月上旬御行列被遊 上覧候二付御行列之内江相立候間、旅仕度三而罷出候様可申渡候事

二月

右老通小島半助差越久、両役承付御徒押江廻ス

桜井庄兵衛

覚

一、茶縮緬袷羽織三ツ

御中間御供組頭

壹人

御小人御使組頭

貳人

右之者共当卯年四月日光山 御宮江 御参詣之節江戸紅葉山

御宮江 御参詣之節之通為着申度奉存候、尤享保・安永度

共留ニ者相見不申候得共格別之御儀ニ御座候間清服ニ而御供為仕度奉存候、此段奉願候、已上

卯正月

御中間頭
御小人頭

御附札撰津守殿被仰渡候事

書面之趣ハ不及御沙汰候事

覚

一、茶縮緬袷羽織 四ツ

御中間組頭

四人

右ハ平日御供不仕日光山 御参詣之節計御供仕候右之者共儀者御旗奉行江引渡手替共四人ニ而御供仕候、然処羽織式ツ請取候而者手替之節着替させ候様可仕哉ニ奉存候間、旧記ニ者相見不申候得共忝人江忝ツ宛手替共為請取申度、此段御内慮奉伺候、以上

卯正月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

黒川嘉兵衛

御附札前御同人

御中間組頭四人羽織之儀ハ伺之通被下候

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭 江

御駕籠之者頭

日光山 御参詣ニ付来ル三月初旬足並 上覽、引続御行列

上覽被 仰出候而も御差支者有之間敷哉否、早々可被申聞候事

二月

桜井庄兵衛

下ケ札

御差支之儀無御座候

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭